

上級日本語学習者と母語話者の読解過程の比較  
A COMPARISON OF READING COMPREHENSION PROCESSES  
IN ADVANCED LEARNERS OF JAPANESE  
AND NATIVE JAPANESE SPEAKERS

高橋亜紀子, 宮城教育大学

Akiko Takahashi, Miyagi University of Education

## 1. はじめに

日本の大学で学ぶ留学生には、アカデミックな場面において、文章を読んで理解するだけでなく、そこから重要な情報を選び出して要約したり、それらをレジュメにまとめたりするなど、より深い理解が求められる。

文章を読んで深い理解に至るためには、第2言語の学習者が文章から構築する表象を精緻化し、さらに深い理解の表象を構築することが必要である(鶴見, 2005)。また、文章には、要点情報と非要点情報が含まれ、両者の関係は要点情報が上位に位置し、非要点情報がその下位に従属する階層関係になっている(西垣, 2003)。

第2言語の学習者である日本語学習者がこの階層性を表象することができれば、文章の要点情報を中心に構造化し、深い理解の表象が構築されていると考えることができる。

上級の日本語学習者を対象とした要約に関する研究において、古本(2003)は、学習者は重要部分の選択はできるが、上位概念での再生や情報の関連付けが不十分であると指摘している。また、レジュメに関する研究に関して、茂住(2006)は、上級の学習者は内容理解ができて、レジュメを作成する過程で、どの部分を抽出するのか、要点をどのように並べるのかについて問題を抱えていたと報告している。

これらの指摘にみられるように、読解上の問題点として、上級学習者であっても、重要な情報の取り出しや情報間の関連付け、並べ替えといった、深いレベルの理解に到達するために要する処理が十分に行われているとは言い難い点があげられる。

以上より、本研究では、情報間の階層関係の観点から学習者による情報の関連付けについての問題点を明らかにし、読解支援への示唆を探ることとした。

## 2. 研究の目的

上級日本語学習者の読解を支援する方法を考えるために、上級の中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、読解の際に表象として生成される情報間の階

層関係にどのような相違がみられるかについて調査する。

### 3. 研究の方法

#### 3.1. 対象者

日本の大学に所属する中国人研究生及び大学院生 10 名(以下、学習者 C1 ~ C10)、日本人大学院生 5 名及び日本人学部生 9 名の計 14 名(以下、母語話者 J1 ~ J14)、合計 24 名である。学習者は全員が旧日本語能力試験の 1 級に合格しており、上級である。

#### 3.2. 筆記再生課題

筆記再生課題とは、読んだ後に文章を参照せずにその内容を思い出せるかぎり想起して、書き出すというものである。これは、読み手がどのように情報を理解したかを測定する方法の 1 つで、読み手がどのような心的表象を構築しているかという読解過程そのものを観察する際にも利用される(木村, 2001)。

この課題は読み手の母語で行われることが多いが、目標言語で行われる場合、上級では読解力そのものの影響が大きい(中川, 2012)。また、英語教育でも ESL 環境では英語による調査が主流である(木村, 2001)。対象者は教室内外で日本語を使用する環境にあり、授業中の課題でもあるため、すべて日本語で行った。

#### 3.3. テキスト

使用したテキストは新聞のコラム欄から選んだ記事である。対象者は普段の授業でも新聞記事を読んでその内容を発表する練習をしており、練習方法や縦書きの文章になじみがある。

使用したのは「知覚のフィルター／知識・価値観で違う認識」(河北新報 2012 年 5 月 24 日)である。旧日本語能力試験の「出題基準」によると、1 級の基準は、字数が 700~1000 字、平均文長が 40~65 文字、漢字含有率が 30~45%、語彙リストからの逸脱率が 10%以内である。今回用いたテキストは、字数が 768 文字、平均文長 42.7 文、漢字含有率が 26.4%、語彙リストからの逸脱率が 3.6%であり、リーディングチュウ太による判定でも、難易度は「ふつう」であった。

#### 3.4. テキストの構造

テキストは、読後の筆記再生課題の採点基準を設定するためにアイディアユニット(以下 IU と記す)の単位に分けた。定義は、佐藤(2005)の、(1)述語(動詞・形容詞など)一つと一つ以上の項を含む節を一つの単位とする、(2)重要な情報を含む場合は、独立した一つの単位とする、の 2 つに従った。この基準を用いて実験者である筆者と日本語母語話者 1 名が別個にテキストを分析し、IU を判定した。

不一致点は協議により解決した。以下、同様に2名で分析した。

次に、各 IU の論理関係と重要性を検討するために、テキスト全体の構造を Meyer(1985)に従い分析した。これは、文章の意味関係と論理関係をもとに分析する手法として、日本語教育の分野の読解研究で認められている(菊池 1997、石井 2006 など)。分析の結果、最も重要な IU が集まる階層 1 から最も重要ではない IU が集まる階層 5 までの 5 つに分かれた。そこで、階層 1 を最重要 IU と判定し、階層 2 を重要 IU、階層 3～5 を詳述 IU と判定した。IU の総数は 38 であり、内訳は、最重要 5、重要 10、詳述 23 であった。材料文全体の構造は呼応型(質問とそれに対する答えが示される型)であった。図 1 にテキストの階層構造を示す。上から階層 1～5 の順に並んでいる。□で囲んだ数字は IU を指す。

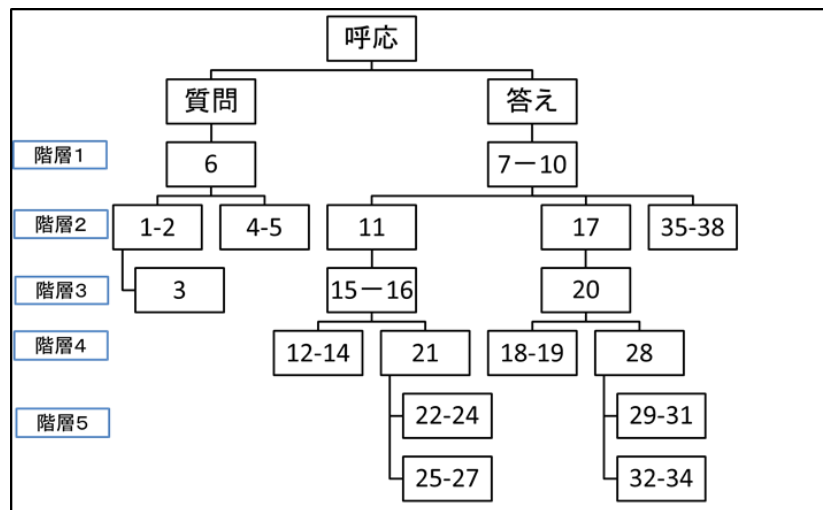


図 1 テキストの階層構造

### 3.5. 手続き

2012年6月に留学生の日本語授業及び大学院生の日本語教育に関する授業、11月に学部生の国語の授業で、課題の一つとして日本語で実施した。

手順は、以下の通りである。(1)テキストを配る際「文章を読んだ後に文章を回収し、その内容を日本語で再生してもらおう」旨を伝え、学習者には10分、母語話者には4分で読んでもらった。時間は、普段の授業で学習者が読みに要する時間を考慮して設定した。(2)文章を回収し、全く違う話題を提示した(直後の短期記憶を減少させるため)。(3)「先ほど読んだ文章の内容を読んでいない人にもわかるように日本語でできるだけ詳しく書いてください」という指示文のみが書かれたA4サイズの白紙1枚を配布し、そこに記入してもらった(時間制限はなし)。なお、辞書の使用は認めた。

### 3.6. データの分析方法

まず、再生されたものをプロトコルデータとし、あらかじめ分けておいた IU に照らし、意味内容が概ね一致していれば再生したとみなした。次に、再生された IU を最重要、重要、詳述の3つに分けて再生数を数え、再生率を算出した。

## 4. 結果

### 4.1. IU の再生率

学習者と母語話者の平均再生率の結果を表1に示す。再生率は、最重要 IU、重要 IU、詳述 IU に分けて算出した。この結果を視覚的に示したものが図2である。

表1 学習者及び母語話者の平均再生率 (%)

	最重要 IU	重要 IU	詳述 IU	合計 IU
学習者 (N=10)	44.00 (8.43)	57.00 (26.26)	44.37 (8.66)	47.62 (9.30)
母語話者 (N=14)	47.14 (23.01)	63.57 (14.46)	35.08 (25.73)	44.18 (19.10)
合計 (N=24)	45.83 (18.15)	60.83 (19.98)	38.95 (20.62)	45.61 (15.59)
t	0.469 <sup>n.s</sup>	0.717 <sup>n.s</sup>	1.251 <sup>n.s</sup>	0.587 <sup>n.s</sup>

( ) 内には標準偏差を示す。t には、t 検定の結果を示す。

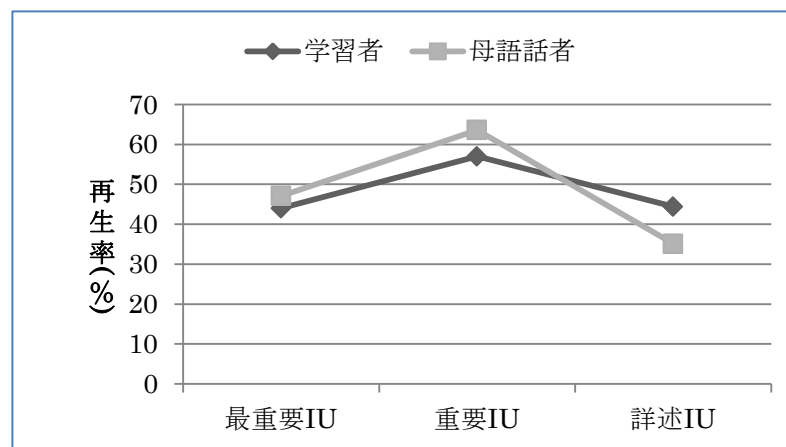


図2 学習者と母語話者の平均再生率 (%)

表1と図2より、最重要 IU 及び重要 IU は、母語話者のほうが学習者よりも多く再生していた。一方、詳述 IU は、学習者のほうが母語話者よりも多く再生していた。また、学習者、母語話者ともに重要 IU が最も多く再生されていた。学習者は重要 IU、詳述 IU、最重要 IU の順に再生していた。母語話者は重要 IU、最重要 IU、詳述 IU の順であった。

そこで、学習者と母語話者との平均再生率を比較するために、t 検定を行った。

その結果、表 1 に示したように、最重要 IU は  $t(17.5)=0.469, n. s.$ 、重要 IU は  $t(12.9)=0.717, n. s.$ 、詳述 IU は  $t(16.8)=1.251, n. s.$ 、合計 IU は  $t(19.9)=0.587, n. s.$  となり、統計的な有意差は見られなかった。

しかし、 $t$  検定を行う際、各 IU の平均再生率の分散がそれぞれ等しくなかったため、学習者と母語話者の重要 IU と詳述 IU について詳しく分析した。重要 IU の再生率を横軸に、詳述 IU の再生率を縦軸にした学習者及び母語話者の散布図を図 3、図 4 に示す。

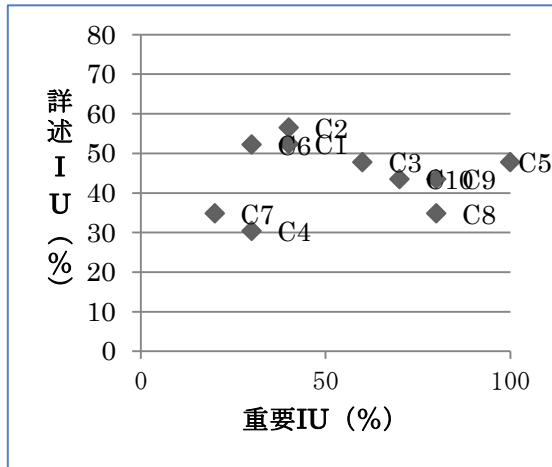


図 3 学習者の散布図

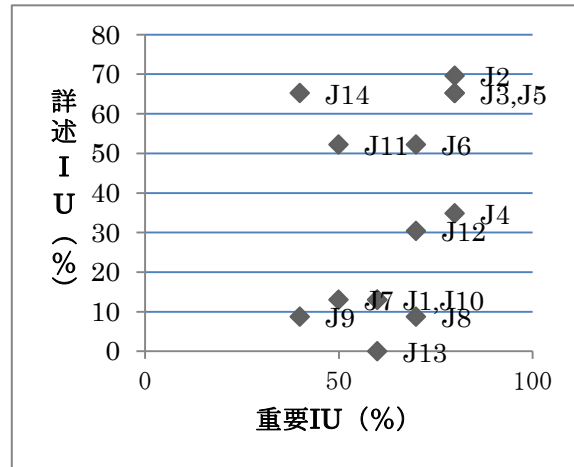


図 4 母語話者の散布図

図 3 より、学習者の重要 IU は 20~100% とばらつきが大きい反面、詳述 IU は 30~60% に集中していた。図 4 からは、母語話者の重要 IU が 40~80% に集中しているのに対して、詳述 IU は 0~70% とばらつきが大きかった。

## 5.2. 階層構造

図 3 で、重要 IU 及び詳述 IU の両者ともに低い学習者 C4 と、両者ともに高い C5 とを比較した。それぞれの階層構造図を図 5、図 6 に示す。先の図 1 と同じもので、上から順に階層 1~5 を示す。なお、図の網掛け部分は、IU が再生されていた部分である。

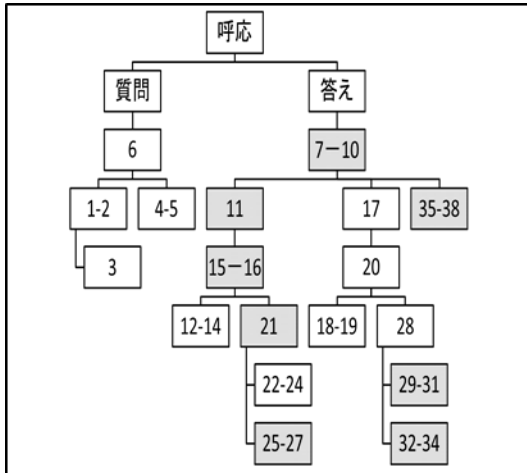


図5 C4が再生した階層構造

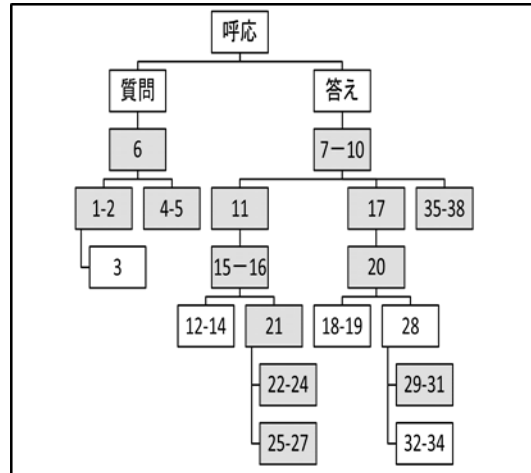


図6 C5が再生した階層構造

図5より、C4は質問側の再生は全くしていなかったが、答え側の階層1は再生していた。しかし、階層2の3つのうち、IU17は再生していなかった。特に、IU17に連続する下位の階層では、階層5のみを再生していた。階層5はテキストの具体例に相当する部分であった。

一方、図6から、C5は質問と答えの関係を捉え、階層1と2はすべて再生していた。また、詳述IUにあたる階層3～5も全てではないが、ほぼ再生していた。

次に、図4で、重要IU及び詳述IUの再生率がともに低いJ9と、両者ともに高いJ2を比較して分析した。それぞれの階層構造を図7、図8に示す。

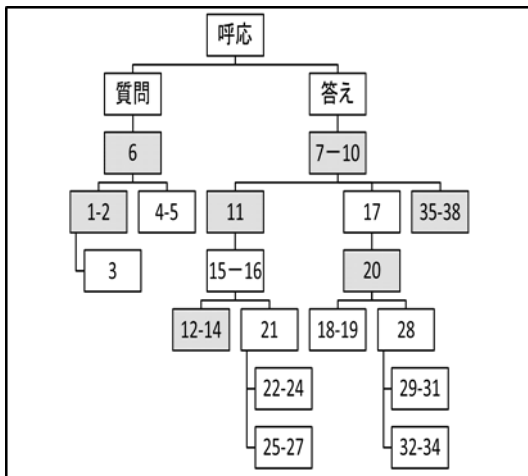


図7 J9が再生した階層構造

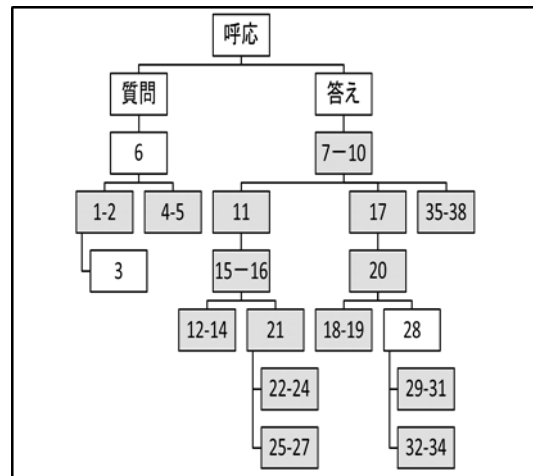


図8 J2が再生した階層構造

図7より、J9は、質問・答えともに階層1は再生していたが、階層2～5は断片的にしか再生していなかった。学習者C4と同様にIU17は再生していなかったが、そのすぐ下の階層3、IU20は再生していた。

一方、図8を見ると、J2は、質問側の階層1、IU6は再生していなかったが、そのすぐ下の階層2はすべて再生していた。また、答え側については、階層1～3まですべて、階層4、5の具体例部分もほぼ再生していた。

### 5.3. プロトコル

ここでは、紙面の都合上、5.2. 階層構造で取り上げた学習者C4とC5のプロトコルのみを取りあげる。まず、C4のプロトコルを示す。

人の認識は人間の五感から表す。人間はおなじものから価値観がそれぞれである。同じものから人間の脳に二つのフィルターを働かせることがある。知覚フィルターは主に人間の意識を表す。(1) 例えば、梅干しに対して、外国人にとってさっぱりわからない人と何の味であろうか、二つのグループに分けられる。日本人に対して、梅干しは体にいいだと言う人もいる。わー、おいしそうと言う人もいる。わー、嫌いという人もいる。これを見ると同じ体験同じものから見える価値観はそれぞれに出てくるのを分ける。知識や意識や価値観など人によって違う結果がよく出てくるのを分ける。(2) 基準を作れば、みんなの考えは同じになるだろうか。みんなの思考力、判断力も同じだろう。こすればいいだろうか。やはり価値観の違うとともに人の価値観もさまざまであると見られる。みんなは一分ずつと社会に役立つことができると思う。

下線部(1)には、階層5に相当する具体例が書かれているが、階層2のIU11とIU17のどちらの具体例なのかは明確に区別されていなかった。上位階層である階層2のIU17は再生されておらず、C4は上位概念の理解にまでは至っていなかった可能性がある。下線部(2)は、テキストには書かれていない部分で、C4が理解した部分をつなぎ合わせて推論していた部分だと考えられる。

次に、C5のプロトコルを示す。

私たちは見たり、聞いたり、感じたりすること、同じ思い出や出来事に対しても、人によって受け取り方が違います。なぜなら、判断をするフィルター、具体的言えば知識フィルターと価値観フィルターが異なるからだ」と作者は述べました。(3) 知識フィルターは、この前同じことに出合ったことがあるかどうかということです。(4) 価値観フィルターは、自分の理想や好嫌いに合うかどうかの問題です。分かりやすく説明するために、作者が梅干しのことを例として挙げました。(5) 梅干しを知る人にとって、すぐ酸っぱいとかのイメージを思い出せる一方、梅干しはわからない人にとって、なかなか手がかりがつけません。また、(6) 梅干しは体にいい物と思う人と梅干しがすっぱくて嫌いな人と梅干しを見る時反応も違うはず。つまり、以上の二つのフィルターが人によって違いますから、人と付き合う場合、この違いをちゃんと意識したほうがいいと作者が勧めます。

このプロトコルから、C5は質問と答え、答えである2つのフィルター（下線部(3)(4)）とその具体例（下線部(5)(6)）との関係も含め、全体の階層関係を把握していたことが分かる。

## 6. 考察

### 6.1. 再生率

学習者と母語話者を比較した結果、学習者は重要、詳述、最重要の順に、母語話者は、重要、最重要、詳述の順にIUを再生していた。また、各IUにおいて両者の統計的な有意差は見られなかった。しかし、両者は等分散ではなかったため、学習者と母語話者の重要IUと詳述IUについて分析したところ、重要IUについては、学習者間のばらつきは大きい、母語話者間では小さかった。詳述IUについては、その逆で、学習者間のばらつきは小さい、母語話者間はばらつきが大きかった。

このことから、母語話者と学習者の再生率には大きな違いは見られないように見えるが、個々のデータを詳しくみると、学習者は詳述IUを中心に再生しており、重要IUが再生できるかどうかにおいて、個人差が大きいことが分かった。つまり、テキストの重要な情報の選択に困難を抱えている学習者がいたことが分かる。

文章の重要部分の認知について、佐藤(2005)は、上級や母語話者は中級学習者と比較して、文章の重要な部分を意識的に判定できると述べている。また、菊池(1997)でも、母語話者や上級学習者は中級学習者よりも文章全体の体系に関わる部分の再生率が高かったと報告している。今回は上級の学習者のみを調べた調査であるが、上級レベルであっても重要な部分を選択して再生する際に課題があることが分かった。

### 6.2. 階層構造

学習者は、重要IU及び詳述IUの再生率がともに低い場合には、階層構造を把握できていなかったが、両者ともに高い場合には把握できていた。また、再生率が低い学習者は、最下層部分の再生が中心で、上位の階層は再生できていなかった。それに対して、母語話者は、質問側が再生されないケースもあったが、答え側では、上位の階層はすべて再生されており、学習者よりも上位の概念で全体を捉えることができていた。また、上位階層が再生されない場合でも、そのすぐ下に続く階層が再生されていた。

これより、母語話者は、上から下の階層へと連続して再生しているのに対し、学習者には、母語話者と同様に再生できるものもいる一方で、下位の階層だけを



切り離して再生し、上位階層との関連性がつかめないものも見られた。言い換えると、具体例などのわかりやすい例が集まる最下層が数多く再生されていた。しかし、その具体例が上位の階層とどう結びつくのか、上位の概念として理解するまでには至っていないことが分かった。

これについて、Carrell(1992)は、テキスト構造が利用できる学習者は利用できない学習者よりも上位レベルの情報を多く再生できると示しており、今回の結果もこれを支持するものといえる。ただし、使用されたテキストが比較対照や記述列挙型の構造のものであり、今回の調査とは異なる。今後は、異なるテキスト構造でも同じ結果が出るのかどうかを検討する必要がある。

また、van Dijk & Kintsch(1983)では、テキストの意味構造はミクロ構造とマクロ構造からできており、マクロ構造はミクロ構造を階層的に構造化したものだとしている。全体の意味や要約により大きな概念を構成するマクロ構造の生成が文章理解において重要である。上位階層が再生できなかった学習者は、この階層が表象できておらず、マクロ構造の生成過程で問題を抱えていたと考えられる。

### 6.3. プロトコル

プロトコルデータからも、階層構造が捉えられていない学習者は、情報間の関連付けができないままに再生したり、不明な点を推論で補おうとしたりしている様子がうかがえた。これについて、藤井他(2012)でも、上級学習者は様々な推測ストラテジーを使って、無理にでも納得してしまうため、よく分からないと思うことがほとんどないと指摘されている。

以上より、情報間の階層関係の観点から捉えると、学習者は与えられた具体的な情報（下位階層）のみを理解しており、抽象的な事柄（上位階層）との階層関係までは把握できていない点が課題である可能性がある。

## 7. まとめと今後の課題

本稿では、上級日本語学習者への読解支援の示唆を得るために、上級の中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、筆記再生課題を用いて、どのような表象が生成されていたのか、両者の結果を比較・分析することを通して、学習者の読解上の問題点を探った。

以下、本研究で明らかになったことをまとめる。

- (1) 学習者は、母語話者と同様に重要 IU を最も多く再生していたが、詳述 IU の再生が中心で、重要 IU の再生には学習者間でばらつきがあった。学習者の中には重要な情報の選択に困難を抱えているものもいた。
- (2) 学習者には、母語話者同様に、重要な情報からそうでないもの、つまり、上位から下位の階層へと関連付けて再生できるものもいる一方で、関連付

けができていないものもいた。

- (3) 学習者には、具体的な情報（下位階層）のみを理解し、抽象的な事柄（上位階層）との関係までは把握できていないものがいた。

以上のように、上級の学習者を対象に分析してみると、重要な情報の選択やその関連性を把握して階層化するというプロセスにおいて、母語話者と同様にできる学習者もいる一方で、そのレベルには達していない学習者もいることが分かった。

今後の課題は、情報を階層化するプロセスにおいて問題を抱えている学習者への具体的な支援を考えるため、内容や構造などの条件を変えたテキストを用いた調査やレジュメの作成を課す調査などを行い、上級学習者の読解上の問題点をさらに探ることである。また、テキストから得られる情報をどのように整理して、どのように関連付けて理解し、表象を生成しているのかについて、実際のプロセスをオンラインでも見ていきたいと考えている。

付記：本研究は、JSPS 科研費 24520563 の助成を受けた研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 石井怜子 (2006) 「図表の呈示及び完成が第二言語学習者の説明文読解に及ぼす影響—中級後半レベルの成人日本語学習者の場合—」『教育心理学研究』5, 498-508.
- 菊池民子 (1997) 「日本語の読解におけるテキスト構造の影響と読解前指導の効果」『日本語教育』95号, 25-36.
- 木村裕三 (2001) 「読みの力はいかに評価できるか」門田修平・野呂忠司(編)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版, 273-309.
- 佐藤礼子 (2005) 『第二言語としての日本語の読解におけるメタ認知の機能に関する研究』広島大学博士学位論文
- 鶴見千津子 (2005) 『日本語学習者の文章理解に及ぼす音声化の影響』風間書房
- 中川知佳子 (2012) 「リーディングテストと他技能の関連」卯城裕司 (編) 『英語リーディングテストの考え方と作り方』研究社, 59-77.
- 西垣順子 (2003) 『児童期後期における読解力の発達に関する研究』北大路書房
- 日本語読解学習支援システム Reading Tutor 「リーディングチュウ太」  
<http://language.tiu.ac.jp/> (2013年8月15日閲覧)
- 藤井明子・花田敦子・藤原深雪・野田尚 (2012) 「上級日本語学習者の読み誤り—学習者は学術論文をどこで読み誤るか—」『2012年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 151-156.
- 古本裕美 (2003) 「日本語の文章は読解後にどのように再構成されるか(1)—日本

語母語話者と上級日本語学習者の要約文を比較してー」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第52号, 243-251.

茂住和世(2006)「学部留学生に対する口頭発表用レジユメの作成指導の実践」『「大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発：統合・協同的アプローチ」科学研究費補助金研究成果報告書』(平成15年～17年度 代表：大島弥生), 197-207.

Carrell,P.L.(1992). Awareness of Text Structure: Effects on Recall. *Language Learning*, 42, 1-20.

Meyer,B,J.F.(1985). Prose Analysis: Purposes, Procedures, and Problems. In B,Briton & J,Black(Eds.),*Understanding Expository Text. A Theoretical and Practical Handbook for Analyzing Explanatory Text*, 269-304, Hillsdale, NJ, Lawrence Erlbaum.

van Dijk,T.A.,& Kintsch,W.(1983). *Strategies of Discourse Comprehension*. NY, Academic Press.

\*使用したテキスト「エコノ女子部<勝間和代>/知覚のフィルター/知識・価値観で違う認識」河北新報 (2012年5月24日夕刊)